

の「へことば」自身が自らに隔たりを置くことなく自ら顕になるようなものとされる。この「へことば」は見えるようにすることではなく、見えない根源的な印象、情感的なパトスである。

「生」やアンリの言う「キリスト教の「真理」」もこのような「へことば」で自ら顕れ、他なる基準に拠ることなく自らを証し立てるので、この「生」や「真理」は「世界のことば」や思考では捉えられない。そうであるなら、この「真理」が「真理」であるといかにしてわれわれは実感するのか。そして、この「真理」についての思考である「キリスト教の哲学」そのものの正当性は何に存するのか。

アンリによれば、「キリスト教の哲学」の解明は、「諸存在に何かを考えさせるのではなく、何かを行わせる」ものである。つまり、「キリスト教の哲学」の自証が完結するのは、この哲学と出会った生ける者たちに「何かを行わせ」たことによつて、またその行為・実践によつてである。行為や実践を促すことができるのは、「何かを考えさせる」ものに過ぎない「世界のことば」ではなく、「生」の「へことば」である。

では、この「キリスト教の哲学」はいかにして「何かを行わせる」哲学となり得たのか。それはまさに「キリスト教の哲学」となったこと、つまり、「生の現象学」がキリスト教を哲学のうちに取り込んだことによるのではないだろうか。この問いに答えるためのヒントとなるのが『キリストのことば』

(二〇〇二)のなかで論じられている、「キリストが人間に語ることば」である。キリストが人間に語ることば、たとえば「汝の敵を愛せ」ということばは、「世界のことば」として捉

えれば理解しがたい矛盾であるが、このことばは「掟」として人間に差し迫り、何らかの感情を抱かせ、何らかの行為へと駆り立てる。

「生の現象学」のことばは、内在的な生の内的構造の解明を目的とした「世界のことば」であり、われわれに情感的に迫り、行動や感情を促す「生」の「へことば」ではなかった。「キリスト教の哲学」は、自らが「何かを行わせる」哲学であることを自らに要請するので、アンリは、感情や行為を喚起する聖書のことばを自らの哲学に絡み合わせ、「キリスト教の哲学」を「何かを行わせる」ものにした。自ら顕れる「キリスト教の哲学」の真理性は、この哲学が「何かを行わせる」ことによつて生ける者に確証され、それと同時に、「キリスト教の哲学」自身も生ける者に「何かを行わせる」ことによつて完結する。「生の現象学」から「キリスト教の哲学」に至つて、アンリは自らの哲学の内容を、この哲学の語り方によつて、「生」の「へことば」を通して体现したのである。

ヨーロッパ・キリスト教の「信」

——坂口ふみ氏の考察を踏まえて——

若林 裕

一世紀に萌芽したキリスト教の広がり、二世紀以降にはヘレニズム・ローマ世界の広範囲に及ぶ。それに伴い、キリスト

第5部会

信仰の教理が二つの主要目的をもって再思考された。一つは、その信仰を異文化世界に適合して説明することであり、もう一つは、必ずしも一様ではなかったキリスト理解を包括的に統合し、極端な偏向を除去するためだった。四世紀以降はそこに、ローマ帝国の意向も強く入り込み、公会議をもって古代教会の教義論争がなされたのである。それを我々は、どのように評価できるだろうか。

『個の誕生』『信の構造』（いずれも岩波書店）を著した坂口ふみ氏は、古代教会におけるその熾烈な論争の重要な果実として、『個』を捉える新たな存在論の誕生を語る。それが顕な仕方では後世に伝わった訳ではないが、ヨーロッパ・キリスト教信仰の背景となっていることを言う。通常、『個』といえば、近代の西欧の事柄、またキルケゴールから始まる実存哲学の系譜を考えていたが、著者は、その源流として古代教会に遡るのである。否、正確には、その『個』の源流の源流とでも言うべきものとして、『イエス』の存在に言及するのである。そのイエスは、『神への愛と隣人への愛』という二つの『愛』を説いた人物と言う。思うに、『愛』とは人の心の深い要請であり、他者に対する人の愛は『利他』とも置き換えられよう。これを横軸に、人の神に対する信頼、すなわち『神と我』という縦軸の関わりが確立されるのである。

その愛を説いたイエスは、結果的には、十字架刑という無残な殺され方をする。著者によれば、キリストのその死を正当化するため、福音書記者たちは『復活』という解釈を与え、パウロはより積極的な『贖罪』という意味を付与して宇宙的・世界

的ドラマを築き上げたというのである（このあたり、新約学的検証からすれば、多少の異論はあるが）。後の三位一体論、キリスト論をめぐる論争の眼目も、この『キリスト』の評価めぐってのものだった。すなわち、『キリストは神か人か』、『神であり人であるならば、どのような仕方であらうのか』と。この消息に関して著者は、公会議で使用されたギリシア語とラテン語に着目し、論述する。そして、ニカイアからカルケドンに至る論争の着地点は、『神は一つのウシア（実体）と三つのヒュポスタシス（ペルソナ）を持ち、キリストは二つのピュシス（本性）を持つ一つのヒュポスタシス（ペルソナ）である』だった。この『三が一』、『二が一』は、パルメニデス以来の矛盾律・同一律からすれば、明白な背理だが、著者は、上述の『ヒュポスタシス＝ペルソナ』の概念を注視し、そこに『個』の概念の誕生という積極的な意味を指摘する。すなわち、キリスト教はここに独自の存在論を持ち、その用語並びに思考枠を借用してきた、『普遍』を志向するギリシア哲学と袂を分かつたのである。

さて、その『個』の個たるところは、キリストだろう。ただし『個』は、我々一人一人にも敷衍される。『ヒュポスタシス（原意は沈殿）＝ペルソナ（原意は仮面）』に基づく『個』、それは一方では『存在の中の流れの留まり』として旧来の存在論からは離れたものであり、一方で『舞台の仮面』として他者との関係性をもつものとしてのダイナミックな概念なのである。著者は、『この強い力を秘めた概念を古代の思想・文化に対抗して取り出さざるをえない状況に思想家たちを駆り立てた原動

力が、イエスの、あらゆる既存のものをのりこえて、裸の個人としての愛を説いたことばであったこともまた、明らかであろう」『個の誕生』二八二、二八三頁」という。その「愛のことば」の射程はどこまで及ぶのか。それは問われ続けねばならないだろう。ともあれ、正負の視座のみでは括り得ないヨーロッパ・キリスト教、なかならず宗教史というものの一段面をここに垣間見せられる思いがした。

トマス・ベリー神父にみる自然と身体

—— 大いなる業のために ——

木村 武史

地球環境問題に代表されるサステイナビリティ問題に諸宗教がいかに対応しているかという比較宗教学的視点から現代アメリカ社会の代表的エコ神学者の一人であるトマス・ベリーの著作を取り上げる。地球環境問題を引き起こしている現代文明からサステイナブルな次世代エコ文明への移行を進める歴史的役割を「大いなる業」と呼ぶベリーの立場は、ティヤール・ド・シャルダンに倣って宗教と自然科学を融合する試みでもあり、世代間倫理問題への一つの解答でもある。

ベリーの地球環境問題に関する一つの立場は次のように言える。歴史的現在には生物多様性が爆発的に増加した新世代の終わりに差し掛かっている。生命に充ち満ちた新世代を終わりに至

らせようとしているのは近代の文明であり、人為的に引き起こされている。この点がそれ以前の地球上における生物（例えば恐竜）の絶滅と異なる。以前はある種の生命種が絶滅するという認識は持たなかったが、科学的知見を持つ現代の我々は、生物多様性が減少している、ある生物種が絶滅しているという知識を持つ以上、意識的に意志を持って次世代エコ文明の創出に取り組まなくてはならない、それが現代世代に課せられた大いなる業である、といえる。

ベリーは少数先住民社会や近代以前のヨーロッパ社会で世界創成神話が機能していた、つまり functional mythology であったことを念頭に、自然科学が発展し、資本主義経済が跋扈する現代では、聖書の創世記に見られる神による世界創造の神話はもはや functional mythology ではないとする。では、何が代わりになるのだろうか。科学的知見に基づいた宇宙論と地球の歴史の物語が現代社会における functional mythology となり得る。ブライアン・スウェインとの共著『The Universe Story』はビッグ・バンに始まる宇宙の歴史から銀河の形成を経て地球の生成と生命の誕生と進化の一連の流れを「物語」として構成しようとした試みであり、『The Great Work』のための神話創出であるといえる。いわゆる地球の「自然」とは、このような宇宙論的な歴史を背景にもったものである。そして、重要な点は、この生態系である自然の生命体の一部である人間が知能を持ち、宇宙の歴史を知ることができるようになったという進化の到達点は、宇宙が自らを人間を通して自己認識的に知るようになったことを示している。